

保育雑想

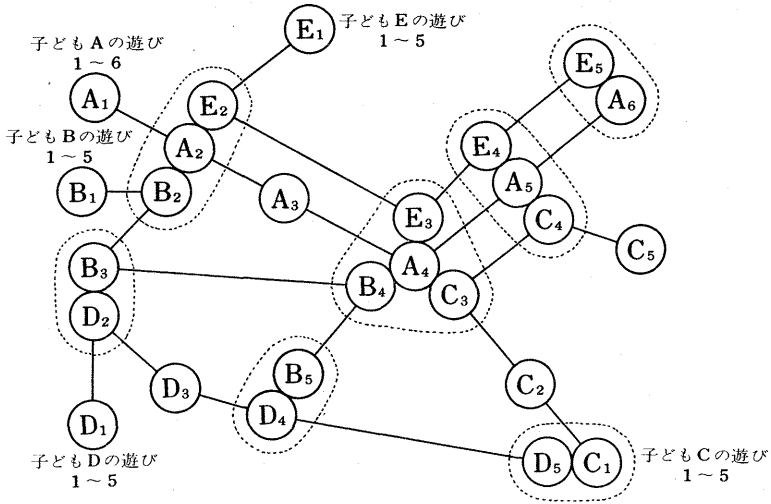
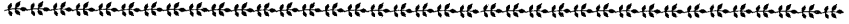
保育の現場に携わりながら、最近感じていることを、二、三、述べてみたいと思います。

最近私は、〃保育は、子どもの生み出す遊びの、無数の連なり〃だと感じています。子どもは、保育の中で、幾つもの〃遊び〃を生み出します。ある子どもの生み出した、〃遊び〃は、他の子どもの〃遊び〃とふれ合うこともあります。三人の子どもの〃遊び〃が、からみ合うこともあります。十人の子どもの〃遊び〃が合わされることもあります。一日の保育は、一人一人の子どもが生み出した〃遊び〃が連なり、ふれ合い、重なり合ったものです。(図参照)

水田 順子



ここで〃遊び〃というのは、子どもの生み出す珠たまごのようなものであると、私は思います。子どもが、手をふれ、足を踏み出した時から始まり、徐々に高まり、ふくらんで、からだも心もその中にいれ込んだ時に、一つの珠となり、光を放つものだと考えます。一つの珠を生み出そうとしている時、子どもの心は踊り、力がわき出していきます。一つの珠が生み出された時、子どもの心は、安らかで、豊かで、深い満足にみちあふれています。そしてその珠は、子どもの心の中に深く沈み込んで、たくわえられてゆくのです。一日の保育を心に思い浮かべるとき、私には、子どもの生み出した無数の珠が、キラキラと輝いているもののように



一日の保育で展開される遊び

点線内は、ふれ合い、
重なり合った遊び

思えます。ある一つの珠は、小さくても美しく輝いています。庭のすみにあるじゅう玉を夢中になって取っていたあの子で作ったものでしょう。二つよりそって光っているのは、向かい合ったブランコに乗って、ほほえみかわしていた二人の子どもが作ったものでしょう。ぎっしりと固まって光っているのは、先生の出してきた粘土に飛びついてきた、幾人もの子どもたちのものでしょう。

保育を「遊びの連なり」として見る事ができるようになると、子どもの姿が、急に生き生きと浮かび上がって見えてきます。保育を、保育者の側から見ていた時には、目にも止まらなかった小さな遊びが、その子どもにとって、どんなに大切なものであるか、はつきりとわかってくるように思います。私は今、子どもたちが、次々に生み出してゆく美しい珠に、目をみはる思いをしているのです。

朝、子どもたちが来る前に、私は、必ず自分にこう言いかせます。「何をしようなんて考えてはいけません。身構えてはいけません。心を静かにして待ちなさい。そして耳をすまして、子どもの心から出る声を聞きなさい」粘土を出したり、紙をはったり、絵の具を用意したり、からだは忙し

く動かしていても、できるだけ、心は静かにして、耳をすますような感じで、子どもを待ちうけます。そして、子どもの心の声を聞きのがすまいと思います。

子どもの声を聞いていけば、私が今、何をしたらよいか、自然にわかり、自然に動くことができます。保育者が、どうあるべきか、どうするべきか、いろいろ研究もされ、経験からも語られることが多いのですが、今、この場での保育にあたっては、学問や経験を、ひとまずおいて、ただ、じっと思いをこめて、子どもの心の声に耳をすまし、子どもの遊びを見つめることによってのみ、この場で、自分がどう動いたらいいのか、わかるように思います。

思いをこめて、じっとしていると、あちらからも、こちらからも、声にならない子どもたちの声が聞こえてきます。「先生、ぼくと一緒にやってくると、楽しいんだけどな」「先生、ここはどんなふうにとったらいいの?」「先生、ほら見てちょうだい」「ママと離れるのは、何だか寂しいな」「等々。子どもは、言葉に出して言わなくても、いろいろなことを、私たちに訴えかけ、語りかけています。私はもう一度、じっとそれらの声を聞いて、どうしても行かずにはいられない所に近づいてゆきます。そして、そこで始

められようとしている遊びを、共にしようと思います。手伝おうとか、教えようとか、発展させようとか、そんなことはあまり思いません。子どもが遊びを生み出している、その時間と場所に、共にあるというだけでいいような気がします。その場に共にあって見守る存在でいいような気がします。そういうあり方が、保育者として正しいのか、まだ、確信はもちきれないのですが、少なくとも、子どもたちが、無数の美しい遊びを、保育の中で生み出していることは事実なのですから、決して間違っていないのだろうと思っています。



保育の場では、同時に幾つもの遊びが展開されています。私は、子どもたちの声に動かされて、一つの遊びにはいつてゆきます。その時、私は、今まで聞こえていた、他の子どもたちの声をたち切って、その遊びの中に、すっかり心をいれ込もうと思えます。共にあるということは、からだも、心も、そこにいれ込むことだと思えます。その遊びが終わるまで、他の子どもたちは、何も見えなくなってしまうこともあります。他の子どもが見えなくなるくらいにはいることができた時の方が、私自身、深い満足を感じるし、

子どもも、喜びが大きいようです。他の子どもが見えなくなるくらいに、はいり込みたいと思います。

保育者は、常にすべての子どもが見えていなくてはいけないといわれますが、私は見えなくてもかまわないのではないかという気がします。保育者の見えない所でも、子どもたちは、遊びを生み出していくことができると、確信しているからです。それに、きょう一日、ほとんど保育者とふれることのなかった子どもでも、その心の中には、きのう、保育者と一緒に作った大きな珠をたくわえられているのかもしれない。そのために、たとえ、きょうふれなくても、保育者の心は、その子どもの中にあり、子どもは、安心してその目を過ごせるのではないかと思います。

保育者は、一つの遊びにはいつている時、他の子どもが見えなくなってもかまわないと思います。やはり、考えしてみると、経験が、保育者の背中に一本、アンテナを立てるような気がします。私も、他の子どもが見えないと言っても、背中のどこかで、他の子どもたちの気配を察して、あぶないことはないかどうか、気を配っています。しかしむしろ、意識の表面からはたち切つて、ひたすら、子どもの生み出す美しい遊びの中に、共にありたいと願うのです。



子どもと保育者は、いうまでもなく、人與人という関係で成り立っています。あまり保育者としての役割意識をもちすぎると、この「人と人」としてのつながりが薄くなつてしまうような気がします。もちろん、保育者としてはたすべき役割も、責任もあります。基本的に、人與人としてのつながりを、しっかりとまたなければ、本当の意味での保育者としての役割も、責任も、はたせないのではないかと思います。私は、保育者という意識をすてて、また、おとなという意識もすてて、子どもとふれ合いたいと思っています。

私が、子どもとふれ合っていると感じられるのは、気持ちに通い合っている、心がふれ合っている、私の心が、子どもに向かつて開き、子どもの心が、私の心に向かつて開いていると、そんなふう感じられる時です。人と人とのつながりは、結局、心が、お互い開かれている状態ではないでしょうか。

子どもの心は、本来、人に対して開かれていると思います。子どもは人を疑ったり、うとましいと思ったり、恐れたりしません。私たちは、誰に対しても、無心に開かれた

子どもの笑顔を見ることができません。子どもを、無条件にかわいいと思うのは、子どもの心が開かれているからです。おとなになるにしたがつて、だんだん、心を閉じていってしまうのかもしれない。

私自身、かたくなに閉じた自分を感じるのですが、しばしばあります。保育をしながら、私はむしろ、自分の閉じた心が、子どもたちの大きく開かれた心にふれることで、逆に、開かれる思いをすることがしばしばです。人と人とのつながりとして見る保育の場では、私の方が、いかに大きなものを子どもたちから与えられているでしょう。すぐにも閉じてしまいそうな心をもった私も、子どもたちの開かれた心にふれると、ふわっと開いてしまい、あたたかい安らぎを感じて、何かホッとする思いです。子どもとふれ合うことができるのは、本当に子どもたちがすばらしいからこそだと、しみじみと感ずることがよくあるのです。

中には、キュッと心を閉じてしまっている子どももいます。人生の出発点で、心を閉じてしまわなければならない子は、本当に不幸だと思うのです。閉じなければならぬような重荷が、この子どもの肩にかかっているのでしょうか。家庭での問題もあるでしょうし、病弱であるということも

ありましょう。生まれつきの性格の問題もあるでしょうし、また、知的な問題もあるでしょう。いろいろな重荷が、すでに子どもの心を閉ざしてしまっているのだと思うと胸のふさがる思いがします。乱暴だとか、落ち付きがないとか、いわゆる困った子どもと言われるのは、心を開けない子どもたちなのです。私自身が、子どもたちとあつて心を開いた時に安らぎを感じたように、この子どもも、もし心を開くことができたなら、安らかな思いをもてるだろう、その時には、乱暴をしたり、ウロウロしたりする必要はなくなり、本来の子どもらしい、生き生きとした生活ができるだろうと思います。私は、切実に、心を開いてほしいと願います。私の方から心を開いて、その子どものそばに近づいてゆきます。私が子どもたちによって心を開かれているように、この子どもが、私の心によって開かれるようにと、思いをこめてそばにいたいと思うのです。